

坂本 忠一（さかもと・ちゅういち）

1、プロフィール

東津軽郡西平内の国立青森療養所に入院。闘病生活中昭和 24 年頃から作歌をはじめ、「群山」「アララギ」に入会、自らも「山彦」を創刊して活躍したが、36 歳の短い人生を終えた。

<生没>

1924(大正 13)年3月 20 日 ~ 1960(昭和 35)年1月 25 日

<代表作>

『坂本忠一歌集』

<青森との関わり>

西津軽郡車力村に生まれる。西平内の国立青森療養所で歌誌「山彦」を発行する。

2、作家解説

大正 13 年3月 20 日、西津軽郡車力村に、父長三、母サヨの三男として生まれる。車力村立尋常高等小学校を卒業。太平洋戦争では海軍下士官として北海道根室に駐在、その後昭和 22 年に胸部疾患にかかり、東津軽郡西平内の国立青森療養所に入院する。24 年頃から作歌をはじめ、「青森アララギ」「群山」「アララギ」に作品を発表して、生涯の精神的支柱をそこに見出した。西平内療養所には 17、8年頃から作歌グループがあり、鹿児島寿蔵、成田小五郎、木村靄村、大沢清三ら県内外の指導者もここを訪れて指導に当たった。坂本は「山彦」を創刊、闘病生活のかたわら和泉ふみ子との再会、将来への展望を予感させながら、それから 10 年の人生が縮図のように歌われてゆく。山彦短歌会の中心的存在であったが、昭和 35 年1月 25 日、36 歳の短い生涯を終えた。

代表作

いたく輝く星の明かりにうちひしぐいまの生のかぎりなき思ひ(30年)
十二年に四度逢ふ日の近づきて草刈る吾にたつ汝が面差(32年)
ひげ剃れと言ひて出でたる汝がかへり待ちつつ長し汝がうかららの中(34年)

3、資料紹介

○『坂本忠一歌集』

図書

1961(昭和36)年12月20日

181mm×129mm

坂本が亡くなった翌年に歌友近藤惇が編集して発行。211首の歌が収められている。長い療養生活に耐えつつ、つつましい恋愛をし、最後には郷里に帰って精一杯生きた坂本忠一の純粋な人間像の記録である。